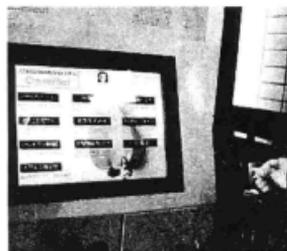


ごみを減らそう!!



「Ecomon Eco Coin」のデザインを練るのもみながら楽しむ。これらはコミュニケーションを育てるための道具でもあるのだ。



エココインを入れて出ると、「ギョウザ一人前サービス」「20%off」などのウッキーチケットが出てくる。ごみ減量の活動upと共に、商店街に足を運んでもらうきっかけにも。



スーパーの「生きびんコーナー」。生きびんを買うと1コインもらえる。



六甲ブランドの日本酒。



「Comon Navi」では地域や商店街の情報が検索できる。

gomi情報最前線

エコ商店街として全国から注目を集めている名古屋市の新大冨商店街。その活動は、1999年1月の資源回収スポット「リサイクルステーション」の設置に始まる。「ごみ減量はごみを出す自分たちの問題」と、市の「ごみ非常事態宣言」に先駆けての取り組みだった。

さらに力を入れているのが、ごみ発生抑制。リターナブルびんを復活させようと、スーパーに「生きびんコーナー」を設置したり、リターナブルびんで大冨ブランドのワインと日本酒を企画、販売も始めた。そのほかにも、商店街ならではの対面販売を活かし、肉屋では容器持参の場合、洋菓子屋では包装材料・保冷材を返却した場合、食卓では箸を持参すると、値引きなどのサービスを行っている。

3月末には市がタッチパネル式「地域情報案内システム」を4台設置。それを機に、商店街では「Ecomon Ecomon」をめぐり、買い物袋を持参するなど、ごみ減量に貢献するとコインを発行。それを情報端末に入れて、ゲームに当たると商店街の「リッキーお買い物チケット」が出てくるという仕組みを立ちあげた。また、商店街の協力参加店では1コイン＝10円換算が使えたり、10コインでエコバッグと交換もできる。

5月には大型の生ごみ処理機を導入し、できた堆肥は身体障害者のリハビリ施設の農園に運び活用予定。「エコロジ」をキーワードに商店街の活性化とコミュニケーションの復活を目指す商店街の取り組みはますます進むと見られる。

（環境新聞記者 橋本美穂、浜口美穂）

新大冨商店街ホームページ

<http://ommon.jp/>

見直そう、広げよう リユースびん

長年、飲料・調味料の容器として活躍してきた、リユース（再使用）できるびんが激減し、主役の座はプラスチックや缶に移行してしまっただけでなく、清涼飲料水はペットボトルに、日本酒は紙パックに、ビールは缶に。あるいは、ワインのように使い捨てのびんに。

洗って何度も使え、ごみも出さず、リサイクルの手間も要らないびん。そのびんを見直そうという動きが少しずつ出てきた。2000年3月、2つの共同購入体でリユースびんのジュースを商品化、自然食品店などの店頭でリユースびんを容器としたジュースが並んだ。これは、京都市ごみ減量推進会議リユースびん検討チームの取り組みによるもの。チームのメンバーが加わって、リユースびんについて熱い談義が2時間にわたって展開された。果たして、リユースびんは、復活するか？（この座談会は3月28日夜に行ったものです）

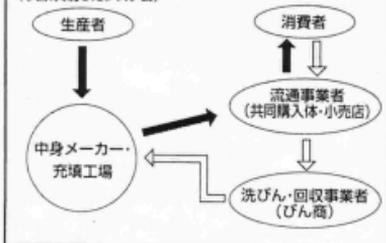


出席者：右より 駒崎裕朗氏（上京小売酒販組合理事長）／堀 孝弘氏（環境市民・グリーンコンシューマーグループリーダー、京都市ごみ減量推進会議理事）／大西啓子氏（環境カウンセラー・リユースびん検討チーム）／吉川康彦氏（京都硝子壺間協同組合）

→ 商品の流れ ⇄ 空びんの流れ

ジュースにおけるリユースびんの流れ

（今回、実現したシステム）



発端は、98年秋に開催された「ごみフェス」での出会い。使い捨て時代を考える会の「ほかさ」として委員会で、牛乳紙パックのリサイクルなどに取り組んできた大西さん、通称「さん」たちは、かねがねリユースびんの実現を願っていた。一方、京都硝子壺間協同組合・吉川さんたちは、紙パックやPETボトルが急増し、リユースびんが激減、自らの経営基盤が危ういとなると同時に、ごみ減らしの機運を生かすシステム構築の危機に直面し、打開策を模索していた。両者の思いが一致し、「リユースびん検討チーム」が発足した（98年12月）。すでに、規格統一されたリユースびんによる飲料の共同購入システムを確立させていた一びん再使用ネットワーク（等の実績に学びつつ、実態調査、シンポジウムの開催を経て、2000年2月共同購入体によるリユースびんを実現した。

リユースびんによるジュース販売に至るまでの経緯

最近のびん事情

一升瓶を扱っている店は、現代では異質な存在です(鶴岡)

鶴岡：こぼれんわ。きょうはリユースびんについて語り合ってみようということでご出陣いただきました。今年の2月、リユースびんによるリユースの賜が始まりましたが、そのシステムづくりに尽力された大西さんからお話しただけです。

大西：リユースびん検封システムでは、まず、4つの共同購入体でどのもろびん商品が出回っているのか、実態調査が始められたのですが、びんの種類が多すぎたので、ただただ燃やしてしまっていました。中身は清涼飲料水からボン酢やドレッシングまで、大昔さ、種類、形もさまざま。共通びんによるリユースシステムの実現を急がねばと思いました。

青川：びんは今の、醸造的な状態であらうとしてリユースされている、ビールびんと一升びんです。牛乳では8割以上紙パックになりました。養蚕用のジュースも一部が残っていますが、監製意図として、ビールびんは最盛期に認極本まで流通していました。去年はおそらく大・中・小びん合わせて45億本程度、年一に押し寄せています。

一升びんは、最盛期の昭和52年頃、約6億本が流通していました。昨年は約5億本、減少しています。一升びんの減少の大きな理由は醤油がペットボトルになり、日本酒の4割近くがアルミ付きの紙パックになったことです。ブームで消費量が増えたワインのびんもワンウェイです。多くが使い捨て容器になってしまっています。

鶴岡：うちの店では、日本酒は極力一升びん

が扱っていません。それしか扱わない店の方が、現代では多いです。一升びんが敬遠されている。今、なぜ一升びんにこだわっているのかという、それはエールの美意識なのです。一升びんは、手で握って、一合ずつの減り方が違う。それを横に置いて酒を飲むことは、一つの美意識だと思っています。美のかけらさえもない紙パックが並んでいるのはもつと、一升びんのまごに羨しいものは大切にして次世代に伝えていかなければ。

青川：一升びんは百年の歴史に開かれ完成された形で、びんを作る土でも使う土でも、一番合理的な形をしているんです。口も玉留口のもので割れにくいですし、日本人はもうもとの文化をないがしろにする風があり、びんにもそれが現れているように思えます。

青川：びんは百年の歴史に開かれ完成された形で、びんを作る土でも使う土でも、一番合理的な形をしているんです。口も玉留口のもので割れにくいですし、日本人はもうもとの文化をないがしろにする風があり、びんにもそれが現れているように思えます。

鶴岡：日本は、外国の生活様式を取り入れてきましたが、ヨーロッパの伝統ある生活様式ではなく、アメリカ様式を導入したことも、使い捨て容器を生み出す原因となったのではないですか。使い捨て飲料容器の問題については大手のメーカーが姿勢を変え、環境に負荷を与えない姿勢を打ち出し、リユースシステムを築くしか道はない。それに、環境を悪化した消費者の生活様式の普及も大要因だと思います。

リユースとごみ減量

リユースびんは6%のごみ減らしに貢献している(吉川)

吉川：日本の一般廃棄物が5000万トンといわれていますが、そのうち6%の300万トンに当たる瓶が再使用され、ごみが減っているのが、リユースびんはまだ環境に貢献していると思います。

しかし、残念ながら、大きな流れとしては一升びんは重い、置かないという販の形態が増えていることは事実です。

鶴岡：うちではもちろん一升びんはリユースしたいです。お客様にはなるべく持って来てくだささいと呼びかけています。

私は、ごみの出なかった昭和40年頃の生活に戻すべからずと思っています。その頃の暮らしに学ばないとごみは増えるばかり。ごみが問題にならなかった時代はどんな生活をしてたのかというのをもう少し学び、現代に活かしていければいい。知恵を絞って、工夫してごみを減らすというだけでは、ごみは減らないです。

大西：私たちがリユースびんの集約にジュースを選んだのはすぐに空になるから、ジュースはリサイクルのびんでも、3日に空いてしまっています。容量も大きく使用頻度もあり、削減の効果の高い容器から、始めようというところからです。



堀 孝弘氏

日本を代表する環境NGO「環境市民」において、グリーンコンシューマーグループリーダーを務める。環境や健康を考えた商品選び、店選びを紹介した「グリーンコンシューマーガイド」の作成活動などを行っている。

もつとリユースを!

ごみ減らしリサイクルではない。それを伝えることが大切(堀)

堀：京都市では、缶・びん・ペットを3種混合でリサイクルするようになりました。市民としても、事業者としても、とかく、リサイクルすればそれで環境にいいことを実践している、とらえられがたなのですが、現状としては多額な税金を使ってリサイクルしているわけですから、リデュース、つまり発生抑制して要らないものは買わない使わないことが普及することが大切です。

ごみ減らしリサイクルではない、リサイクルの前にリユースありきたりと、理解を促していきたいものです。リサイクルするのは最後の手段。できるだけ最小限に抑えたいと。

大西：資源シフトとして回収されたびんも、すべてがリサイクルされているわけではなく、半分以上が埋立られています。税金や大量のエネルギーが使われています。今大切なのは、リユース



大西啓子氏

使い捨て時代を考える会において「ほかさんといて委員会」で、84年牛乳パックのリサイクルを始め、自主的にごみ問題に取り組み、他に、農薬、洗剤など環境問題全般に関わり活動してきた。99年より環境カウンセラーに。現在、きょうとグリーンファンド事務局にも関わっている。

大きい。リサイクルしなくてもいい、リユースという道を選択するようにしなければ。

質問：リサイクルをちゃんと推進すると、大量のエネルギーを使うことになり、結局、電力会社などが間に絡んで作る方向に傾いてしまっている。また、缶は、健康への影

スという事や社会の中で制度として取りかせることではないでしょうか。
今のところ市民は、自分が出したごみは行政が処理するものだと思ひ込んでいます。環境教育の積み重ねがない日本では行政頼みの体質が抜けないため、ごみ処理に税金を使うことになるのです。

私たちのチームがリユースびんのシステムを確立するにあたって、行政の力を頼まなくてもできるという、ひとつの手法にしたかった。物を作った人と売った人と買った人が三者で責任を持ち、ごみを作らないようにするモデルにしたかったのです。

質問：我々、リユース業者からすると、ワンウェイ容器には矛盾を感じます。我々の業界が自主的に回っているリユースびん、多額の税金を使って処理されているワンウェイ容器、どっちが環境にいいのかが、経済的か、結構は明白だと思いますが…。メーカーにも消費者にもワンウェイ容器が選ばれています。
それに、急増しているペットボトルや缶は、リサイクルするにしても、大量にエネルギーを消費し、コストもかかり、社会にとって問題か

影響も心配です。捨てるなどというも必要場面以外は減らしたほうがいい。リサイクルが広がる中、環境を変える必要があります。使えるものは何度も使う、リユースをもっと普及させていかなければ、とんでもない方向にいくのが怖いです。

飲料会社は、メーカーに引き取る責任があることを音を大にして訴えていかないと、私たちの未来が危うくなってきます。お金の問題で引き取るのができないのなら、販売価格にプラスされ、売れなくすればいいのです。

デポジット制の可能性

デポジットが普及しているヨーロッパではEUとして包摂税の動きが(吉川)

大西：ひと昔前、牛乳などを買うと、お店の人がカードをくれ、空しびんをカードを持って返却にいって、びん代として10円返してくれ、という仕組みがありました。今、一升びんでもそういう形が復活すればいい。例えば「びんや、

このびんがジュース高い、でもお店に持っていったら、お安くねばら」というようなシステムを作り、十分に理解していない市民も引きずり込める仕組みができたと思ひます。
質問：仕掛けや仕組みづくりも大切でしょうが、数年後には、京都府も物理的にごみを集められなくなるのではないのでしょうか。また、デポジットが有効になってくると思ひます。
吉川：デポジットというのは消費者に責任を負わせるのなんですよ。モデルに頼らないで、ちゃんと捨てた人が罰をする仕組みなんです。ヨーロッパではデポジットが普及していますが、EU統一後も、包摂税実施の動きが出ている状態です。例えば、ドイツを中心としたリユース同盟という団体が、リットル当たりの05ユーロの統一した包摂税をじに提案しています。

日本では基本的にごみ処理が税金で回っていて、一般消費者がお金を払っていますが、EUの包摂税はメーカー側が担うわけです。ワンウェイ容器の状態がそのまま続くのであれば、日本でも包摂税という案を考えてもいいのではなないでしょうか。

大西：私は消費者の立場として、リユースびんのシステムの開発に参画したのですが、消費者も流通業者もメーカーも洗ひん・回収業者も揃えないシステムを作ろうというのを、ひとつの目標としました。

具体的には流通

業者と消費者の間でのデポジットで、売る時には何円かの東せ金を加えてジュースを販売し、空しびんを返すと、消費者にいくらかのバックがあり、空しびんを返さないと、びん代が負担になるという形でのデポジットを組み込んで欲しいです。

酒造さんが今とても頑張っておられ、リユースを推進させようとしておられますが、消費者の理解なしに飲料、調味料の販売は続行れません。消費者に対して問題も出てきて、買いたい飲物の状態でもなく、買う側としての責任を担っていただけるようなシステムが必要だと思います。

容器包装リサイクル法の課題

メーカーや消費者の尻拭いを行政がやるべきではない(大西)

質問：牛乳パック、空き缶など、リサイクルは環境にいいとの評価を得て、消費者も行政も一緒にリサイクルへと進み出した。ペットボトルは



鶴岡裕朗氏

東京都大宮南店街で、酒を経営。ラベルに貼かれ、極力一升びんの酒を扱う。現在、上京と北区の約220軒の酒の相織である上京小売酒販組合理事長を務め、その傘下の近代経営推進グループの前代表世話人として空しびん回収システム、ロカルデポジットを進めている。

小型が解禁されたために大量に商品化が進み、食品類のリサイクル法が完全実施され今、これが行政の骨になっていきます。

青川：容器がリサイクル法が出来てから、まずまず自治体間に揉まってきた差が芳ざれていきます。ペットボトル飲料の伸び率は1.30倍前後。すごい勢いで伸びていますからね。

今、多くの自治体ではペットボトルを圧縮梱包し、運費をかけて引き取ってもらっているのが現状なようです。ペットボトルも罐詰も相当量が中国へ輸出されているものもあって聞きます。中国は人件費が安いですが、手で不純物を取るため、ものすごく高度の高い機械が出来てくるんです。それがヨーロッパに運り、衣服の素材として用いられています。

鶴岡：ペットボトルは可燃性があり、人間で言うと皮膚呼吸している状態になり、飲料や調味料の保存性は悪いのです。びんはガスプロックするので腐敗しにくいという特性があります。大西：どう考えても、買いたばい捨てたばいしの消費者の尻拭いに行かざるべきではない。せっかくごみ減量推進会議があるのですから、パートナーシップならでの組織を上手に活用して、周りの人を引き込むような事を考えていってほしい。

青川：京都でもびん、名古屋のようにごみ非常事態宣言をしようという話です。
堀：空き缶にしても、ペットボトルにしても行政がリサイクルをややる場合は市民の大多数が、それらの容器を利用してこういう状況があるからなのです。けれどそれは、飲んでる人はたくさん飲み、飲んでない人は全く飲んでいない。それを一律で税金で処理していいものではないでしょうか。人によってばらつきがあるはず。一度、調査してみたいという話があります。

つきがあるか、不ふ感感が明らかになるでしょう。

青川：缶製品は、現在、400億倍くらいい生産されています。でも、僕の家からはジュースの缶は出ない。僕自身は缶でも買わない。堀：我が家でも同じです。5人家族ですが、ペットボトルの消費は年々少減。つまり、1人年1本、しかもすべて飲料以外です。それでも不便に感じるところはありません。こういう家庭もあるのです。

リユースへの道

拡大生産者責任を訴え、無駄のないリユースを広げたい(堀)

堀：今まで小売業の方は、消費者とメーカーとの間で言いたいことも言えずに問題を抱え込んでしまいがちだったように思えます。鶴岡さんのように、立場を明確にされる売り手が増えれば飲料業界の事情も変わるでしょうね。上京、北区内の酒販店の動きはどうかです。

鶴岡：私たち、上京小売酒販組合の中に近代経営推進グループがあり、有志が集まっていますので、なんとかリユースシステムを立ち上げていこうと思っています。私共酒販店は今、大変な事の中で、生き残るための一つの手段として、皆、リユースを積極的に考えています。牛乳屋さんではびんの扱いが徹底されています。牛乳業があり、これに刺激を受けています。

リユースシステムが面白いの活性化の鍵を握る価値を感じています。そして私たちも環境に

貢献したい。

大西：お酒などの嗜好品のもの、潤滑油など基本的な調味料と、ボン酢やめんつゆなどの中間的な調味料とは、容器としてのありさま異なります。分けてもらえ、廃棄を少しでも減らされるような議論をしましょう。

リユースびん換約システムでは、美型性能などをやっていたと、中身メーカーさんに100%にあたって行くと、具体的にこのびんを使ってもう使えんかとか、びんの統一やラベル、キャップの事についての提案をされています。大きなメーカーよりは、小さいメーカーに対して理解を求め、100%ひたひた受えていけたらいいと思っています。

堀：使い捨てにする、リサイクルにする、結局飲料容器にはお金がかかり、エネルギーも消費する。大量に容器を利用する人、あまり利用していない人、アンバランスなので一律の税金をまかっている。そして、リユースのびんは行政(税金)に頼らず、民間の工夫、努力で動いている。今日の話そんなことが明確になりました。

無駄もごみも出さないリユースシステムを復活させるための目と、最終的にかいどう、最終的には拡大生産者責任原則といことになるのではないのでしょうか。問題解決の道はそこにかかっています。

「へ一部の消費者の思いだけで結構がない」、小売業の努力だけで多事態は変

わりません。

無駄な税金を使わず、環境対策への予算を軽減し、浮いた税金をまっくらりや教育、福祉にまわし、有効に使ってほしい。私は、そう思います。

この座談会は、3月28日夜に行なったものです。

用語説明

●拡大生産者責任 (EPR)
商品の製造者が生産から廃棄に関わる責任を負うこと。

●Return Producer Responsibilityの略。

●ローカルデポジット

販売時に容器に保証金を上乗せし、容器の返却時に保証金を払い戻しするシステムを、地域限定で行うこと。

●ワンウェイ容器

一回限りの使用で使い捨てる容器のこと。



吉川康彦氏

伏見区で洗瓶業を営む吉川商店の若きホープ。急変する飲料容器事情に危機感を抱き、リユースシステムの復活を訴えている。最近発定した、リターナブルプラスチック研究会のメンバーでもある。

小売業界にレジ袋の有料化と ノー包装デー実施を協力依頼

資源循環リサイクル法の完全施行を前に、京都市でも約2%（家庭ごみの総量の内、約600t）のごみとなって排出されているレジ袋の削減に向けて、スーパー、百貨店など小売業者を対象にレジ袋の有料化およびノー包装デーの実施を呼びかけた。

去る2月13日午後、平安会館では、京都市ごみ減量推進会議の会長、理事、事業化委員会（のメンバーが、京都百貨店協会、日本チェーンストア協会関西支部などの参加者に協力依頼を行うと同席に、レジ袋有料化実施についての意見交換も行われた。

現実として買い物所持率は高まっていない。しかし、完全無料はサリレスとしてお客様の要望を無視できないなど、具体的な意見が出された。

参考：依頼文

依頼

**ごみを減らし、地球環境を守るために
レジで渡すポリ袋は有料化して下さい。
ノー包装デーを実施して下さい。**

現在、各々のお店では、買い物の際にレジで無料のポリ袋を交付されています。「缶・びん、ペットボトルを出すときにはレジ袋が便利」—そういう声もよく聞きます。でも、レジ袋は買い物をするたびにたまっていきます。使いきれない分は、結局ごみとして捨てざるをえません。そして、ごみとして燃やせば、地球温暖化の原因となる二酸化炭素が大量に発生してしまいます。

私たち、そして、これからの世代が元気に暮らしていくためには、その舞台となる地球を大切にしなければいけません。レジ袋を減らす—そんなちょっとしたことの積み重ねが、健康な地球、ひいては私たちの健康につながっていくのです。

私たちはこれまでにも、「買い物にはマイバッグを持って行き、レジ袋は断りましょう。」といった呼びかけを行ってきました。が、このような呼びかけだけで、レジ袋を大幅に減らすことは難しいというのも現実です。

そこで今回、流通・販売に携わっている皆さんに、レジ袋の有料化の実施、そしてさらにごみを減らすために、原則として商品の包装を行わない「ノー包装デー」の実施について依頼させていただくことにしました。

本取組の趣旨を御理解いただき、ぜひ早急に、検討・実施していただきますようよろしくお願いいたします。

京都市ごみ減量推進会議

(当日、西脇悦子理事によって読み上げられた)



「レジ袋の有料化」と依頼文を読み西脇理事

地域活動支援実行委員会が会議を開催 地域から会員が集合

2月22日（火）午後、地域活動支援実行委員会（山内寛委員長）の会議が開かれた。まず、「グリーンコンシューマー」をテーマに、環境市民・堀孝弘氏より講演。その後、各地域ごみ減量推進会議の出席者が現状報告などを行った。廃食用油の回収をきっかけにして会員が増え続けて、3月末現在地域ごみ減量推進会議の会員は27会員。ネットワークとしての機能が待たれている。

当日は、積極的な発言があり、行動力を持つ地域ごみ減量推進会議のパワーが会場にみぎやっていた。



招待作家の作品、子どもたちの作品が 並んだ第3回こみアート展開催

1997年11月に第1回、1998年10月第2回と継続してきた「こみアート展」3月24日(金)・25日(土)・26日(日)、元京都市立龍池小学校にて第3回こみアート展を開催した。招待作家として自分の家族からひらりとイラストやこみを題材とした作品を発表し続けている、藤巻忠志氏、鹿物を生かした造形を手がける三浦園田氏、また、グループ展として京都精華大学生7名を招き、古い学校の教室に展示した。

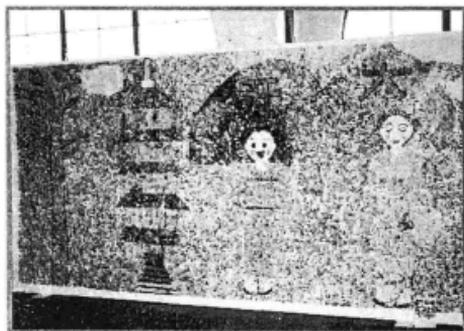
また、同時に「子どもたちのこみアートコンテスト」による応募作品を配点を展示した。21日には、高月敏彦氏、金澤毅成安造形大学教授、アーティスト高見順恵氏による審査会が開かれ、表彰作品が選ばれた。26日午後には、優秀作の応募者が集い、表彰式が開催され、壇上×横4メートルに及びチラシしり絵をクラスを単位で制作した京都市立西院小学校5年1組がこみ大賞に輝いた。



100 3 25



レジ袋で作った服。藤巻忠志氏の作品



こみ大賞に輝いた西院小学校5年1組のチラシしり絵

第3回こみアート展

11月24日(金) 15時～18時
11月25日(土) 10時～17時
11月26日(日) 10時～17時
京都市立龍池小学校
〒605-8585 京都市東山区龍池1-1-1
入場無料
主 催 京都市こみ推進委員会

ワンウェイ飲料容器はもう要らない！ リターナブルプラスチック研究会が発足

急増するプラスチック飲料容器の環境への負荷が問われている。ペットボトルは、再資源として回収されたものの行き場がないまま放置されたり、一般ごみとして捨てられ焼却されているのが現状だ。

しかし一層、軽量容器になじんだ消費者にびんの重荷は使用に負担がかかる。

プラスチック飲料容器の環境負荷を減らすには再使用(リユース)という道がある。

現実に、ヨーロッパではペットボトルは約20回リユースされている。

日本でもこのプラスチック飲料容器のリユースシステムを確立できないものかと、その方向性を探る研究会がこの4月

京都市でリターン推進会議を発足した。「リターナブルプラスチック研究会(山内 寛会長)」と称する組織で、洗ひん業者、流通メーカー、容器メーカー、小売業者など12名で構成される。

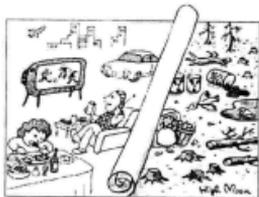
去る4月14日第1回の会議が開かれ、開会のあいさつや京都市の資源ごみの状況、リターナブルプラスチックの現状などの報告が行われた。今後毎月1回見学会や報告会を兼ねた会議を設け、リターナブルプラスチック飲料容器のシナリオ構築を推進していきたいとしている。





しょうみ(賞味)期限がごみ起源

High Moon

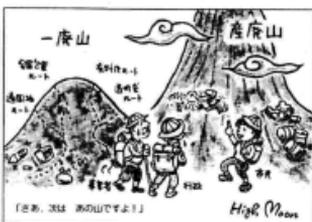


学生と何を語り合うか

同志社女子大学生活学部教授 佐々木 佳代

私の勤務している大学で教育は学部によってかなり異なるが、私の所属している学科(生活科学部、人間生活学科、今出川)では、(生)活科学部、人間生活学科、今出川)では、

「基礎研究」は教員1人につき学生十数人、2年次の「都市環境論」、3年次の「演習」は100人まで、4年次の「卒論指導」は教員につき同数(成績はできる)で十数人、つまり、1年から4年まで一貫して学生は同じ教員にかかわることができ、教員の方は同じ学生に、その発達レベルに応じた教育をするだけでなく、個人的なかわり、場合によっては私生活へのアドバイスも求められる事になる。



1年次「基礎研究」でどのようなテキストを取りよけるか、これがむづかしい。ここ数年、私はハイ・ムーン(高月穂)作「絵コロッジ」を使用している。タイトルに絡

ていない新1年次生が十数人、少しずつでも

自分の意見を言い、人の考えを聞く場としての基礎研究の教材としてはよく出来ている。この教材をいろいろの参考文献も使用しつつ、1単元を報告、その後討論という形式になる。そこは女子学生だけに、自分の家や母親の実体験が披露される。その時、私が毎年こまら

とされたのは、地方から来て下宿している学生が、「絵コロッジ」の廃棄物の壁で、「なぜ京都は三を向かも一様に捨てていいのですか」という質問にあつた時である。分別収集をかなり徹底してやっている地方から出てきた学生が、マンションの大家さんに「いいからすべて一緒に入れさせて下さい」と言われた時のショックを聞かされるのはいい。そしてまた、ファーストフードやパン屋でアルバイトをしている学生が、「掃除がきたら掃除しなければならぬのをなんとか出来ないかと」と話問されるのはじつとじつと。

しかしそのような学生も、学生を道って飛躍的に成長し、卒論テーマも「環境政策」とし

ての廃棄物回収政策「ダイオキシンのから循環型経済を考へる」、「エコロジションとエネルギー生産性」大隈、風からエネルギーをとり込む、「企業の経営戦略としての環境経営」、「日本の循環型社会構築の課題」家業・自動車からの考察」など、参考文献も20〜30冊あけて、かなり高いレベルの卒論を書き、OHPでエッセイを用いた卒論発表をやる。

4年次では「環境マネジメント」にもコスト削減(トイツ100社の1000の成功例)、マクシミリアン・ゲーグリング、今泉みね子訳、白水社、99年9月、などの本を既出のようになり、理論的展望を持ち、就職活動をしているなかで、セミナーに行ったところの企業説明者に、環境問題の取り組みの実態はどうか? とか、「ISO14001はいつとやるのですか?」とかいった説明者が目を白濁させるような質問をして帰ってくるようになる。企業側と学生の意識のズレが起こる。私も学生がそのような質問をしてくることばかりで、それでもこの就職状況の厳しい中、ゼミや卒論指導のかなり徹底した努力が奏しているのが就職先がまぎまぎしていくのはうれしい。

最近読んだ本の中でも、上記の本は非常に興味深い本である。企業経営者が、第三次産業革命は自然との共存と認識し、エコロジ、エフミー、社会的発展を重視し、環境マネジメントによって企業のコスト全体の2〜5%が削減できる経路、主張していることである。

多感な時期の学生と未来を語りなければ、授業は飽いままであらう。

プラスチック製容器包装の 分別収集調査レポート

これまでの経緯

平成12年度から完全施行される容器包装リサイクル法（以下容リ法）に向けて、京都市はプラスチック製容器包装の分別収集手法調査を実施した。（平成11年10月から平成12年3月までの半年間）この調査は市民への啓発手法の検討や収集運搬体制づくりのための基礎的なデータを把握し、分析するためのもの。容リ法では、飲料・醤油用ペットボトルを除くプラスチック製容器包装などが対象品目となるが、実施については各市町村にゆだねられている。

プラスチック製容器包装の分別収集、再資源化に取り組む京都市としては、収集量の推計や異物混入率の測定、市民啓発効果測定などを基本に効率よく体制づくりを進めたいところ。左京区聖護院・川東学区、養徳学区、伏見区南浜学区の3地区、合計約1,000世帯で行われた収集はどうだったのか。実施5カ月を過ぎた3月の状況をレポートしてみた。

◎対象地区、世帯数

3地区、合計約1,000世帯

（左京区聖護院及び川東学区の内約300世帯、

養徳学区の内約300世帯並びに伏見区南浜

学区の内約300世帯）

◎収集方法

毎週一回、市による直営収集

◎収集品目

・食料品や日用品のボトル（シャンプー、洗

剤類、調味料類、飲料容器など）

※フタやノズルは外し家庭ごみへ

※マヨネーズなどチューブ類は家庭ごみへ

・食料品の模様が付き有色トレイ

※ラップは外す

※白色トレイは区別回収へ

※黄色品のカップ・パック（湯・旨湯、ラー

メン、ヨーグルトなど）

・食料品や日用品の袋

※食料品が残った袋、小さな袋は家庭ごみへ

・日用品のパック等容器（粉せけん、ウエ

ットティッシュなど）

※フタやプラスチック容器は家庭ごみへ

※発泡スチロール製容器類

※食品残渣の付着等、衛生面から、洗浄の困難

なもの（ケチャップやマヨネーズのボトル、

チューブ、ラップ類）及び収集、運搬時に飛

散しやすいもの（ボトル類のキャップ、電池

やカップ種等のシュリンクパック等）は除外

出し方のルール

1. 汚れは洗って出す。

2. 吸いがらなどの異物は入れない。

3. プラスチック以外の素材ははずす。

左京区聖護院・川東学区で開催された中
間報告会にて（3月16日）「木」教文センター
にて開催

「シールはとるのですか？」「裏紙部分をハ
サミで切ってもいいですか？」「マヨネーズ、
ケチャップ洗っても油分がとれないか？」等々、
質疑応答。川東の市民を対象とした中間報告会では、次々と質問が飛び出した。

プラスチック製容器包装が多岐にわたって出
回っている現代、分別収集に協力する市民側が
混乱するの無意味はない。当然、異物混入が起
きかねる。例えば「コーティング紙のヨーグルト



左京区聖護院（左）聖護院センター、川東学区（右）聖護院センターにて開催された中間報告会（1日）の模様（写真：木村浩一、木村浩一）

京都市では4月以降、モデル収集との位置
づけでプラスチック製容器包装の分別収集を
本格させ、全市での分別収集の足がかりに
したいと考えている。

容器をはじめ、中には資源ごみに出すべき
缶、びん、ペットボトルまでも混入しがち。
また、市はこの日、中間報告会として市民の
参加状況については、世帯数が増加している
こと、プラスチック製容器包装分別排出の原則
である、汚れをおとす、そこについては、ま
だまだ浸透していないこと、このプラスチック
製容器包装分別収集による家庭ごみの容
積が減っていることを報告した。

この日は、市民の声を代弁して、聖護院・川
東、新田学区ごみ減量推進会議今西智子会長
は、「洗ったりが乾かし、出す手間暇がかかり
プラスチックの分別は担当者がかる。企
業に働きかけ、容器の統一を進める動きが
あってもいいのでは、そして出しやすくリサイ
クルしやすいプラスチックの開発を願
いたい。また、リサイクルするよりごみを出
さない暮らしを市民としてみかげよう」と発
言した。

会員探訪

現在206に達している京都市ごみ減量推進会議の会員。それぞれにごみ減量への取り組みがあるにちがいありません。知恵と工夫にあふれた活動に学ぶことは、ごみ減量への取り組みをさらに活発化させる上で、大いにプラス。ごみ減量に前向きな会員を訪ねていきました。

株式会社ワコール

Q 昨年8月、新社屋の完成に際し、ごみを出さないことを目標にされたと聞きましたが、異体対策は?

A 出されるごみを限りなくゼロにするのができました。これでは毎日、500個が作られ、約14キロワットの食へんに残しや野菜くずが排出されていますが、それを水で洗い、下水に流し捨てています。

機械に入れた生ごみは、タイマーでセットされた40℃の湯とともに攪拌され、発酵し、水が変わる仕組みです。生ごみを堆肥化する方もありますが、当社では、水化するのが最善策と考えこの機器を採用したわけです。しかし、この機械がそれを解決するわけではありません。機械に入れる前には、分別しなければならず、やはり、ごみへの意識を持つことが大切だと感じます。

トイレに載っているフキンなどは分別し、ごみとして捨てています。また書類などを分解して資源回収するものは、割き員を使うので、メニュー本考える段階でまっています。

食卓では、使い捨ての割り箸ではなく、洗って何度も使える漆の箸を使用しています。カフエテリア形式の食堂の一角に、洗浄された割り箸が立ち並んでいます。

Q 新社屋完成に伴い、備品什器類、調理類など不用品が排出されたと思うのですが、どう処理されましたか?

A どの備品什器でも大切に扱い、できるだけ長く持ちこたせるよう努めるのは当社の基本方針で

す。新しい機器が出たらということで、新社屋に移したからといって簡単に買い換えるようなことはしません。基本的には、今まで使っていた備品をそのまま使い続けています。それでもやはり、不用品は出てきます。新社屋移転に伴い出た不用品を回収し、社内で再使用を呼びかけたところ、始の品が必要とする部室に引き取られていきました。

Q 開分以前から、ペーパーレス化を図っていらっしゃいますか?

A 当社では、7、8年前から充分かなりペーパーレス化を進めています。WALIS (W-Work and Accounting List/Transcription) 型の設備のシステムを導入し、通称ワルンという社内ネットワークを活用し、出達の申請、社内指示等は、端末でやり取りしています。このシステムの活用により、面的に紙ごみを減らすことができます。

オフィスの紙ごみについては現在、(一)コピー用紙、(二)コピー用紙の上質紙、(三)新聞、(四)パンフレット、雑誌類に分別しています。

各部室に、紙質類の分別ボックスを設けており、社員一人ひとりが取り込んで処理できるようにしています。その後、紙ごみは各ステーションからカ所に集められ、毎週1回、製紙会社へと回収されていきます。月間排出量は、約4.5トン。紙ごみの分別については当社では7年前から実施、分別別業種は一人ひとりに徹底しているように、問題が生じていません。

紙ごみを減らすため、反古紙(裏紙)の活用も積極的に進めています。両面用紙に使うのはもちろん、社内の申請書なども、反古紙に印刷したものを用いています。ただ、両面コピーなどは、紙ごみの問題などがあります。そこを解決して欲しいものです。

Q 環境を股への取り組みはいかがでしょうか?

A 21世紀に向けて、当社としては環境に前向きに取り組みたいと考え、1999年4月環境委員会を設立させました。今後、どんな環境対策を推進するか全社的に検討を重ねているところですが、工場では、また一部で、製造段階で排出される不要な綿布を分別回収し、再使用に回しています。この試みは、もっと広げていきたいと考えています。



右下に置かれた分別ごみ回収ボックス



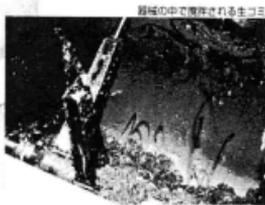
質疑にお答えいただいた
環境部課長担当 井上謙 課長

株式会社ワコール

本社所在地
〒601-8530
京都市南区吉祥院中島町29
☎075-682-1014
営業種目
衣服及び洋装雑貨の製造、販売他



生ごみ処理装置に分別後の生ごみを投入



機械の中で攪拌される生ごみ

食堂では、くり返し使える箸を使用

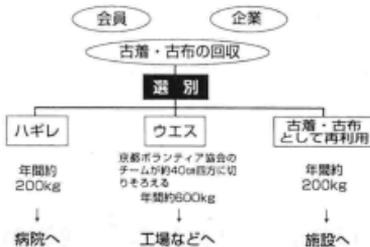


トイレに載っているフキンなどは分別し、ごみとして捨てています。また書類などを分解して資源回収するものは、割き員を使うので、メニュー本考える段階でまっています。

食卓では、使い捨ての割り箸ではなく、洗って何度も使える漆の箸を使用しています。カフエテリア形式の食堂の一角に、洗浄された割り箸が立ち並んでいます。

Q 新社屋完成に伴い、備品什器類、調理類など不用品が排出されたと思うのですが、どう処理されましたか?

A どの備品什器でも大切に扱い、できるだけ長く持ちこたせるよう努めるのは当社の基本方針で



事務局のみなさん(前列左) 京本静江事務局員 前列右 田島寿史事務局次長

社団法人 京都ボランティア協会

Q 京都ボランティア協会とは、どんな団体なのですか？

A 当協会は、1980年京都においてボランティア活動が広がるなか、情報交換やコーディネート施設を持つセンターが必要になり、任意団体として設立されました。草の根的な活動を続けているボランティア、施設のスタッフ等の学習と動みの場として、また、より良い市民社会形成のための活動拠点であり、ボランティア活動の向上を目指して活動しています。ボランティア活動に関するコーディネートも相談窓口で受け付けています。ボランティアの支援、広報活動を展開しています。研修事業として京都ボランティア大学と称する総論講座を開催したり、車いす自立生活を支援する技術教室なども開いています。またボランティアに関する研究事業も行っています。

Q 廃食用油を再利用して石けんづくりをされていると聞きましたか？

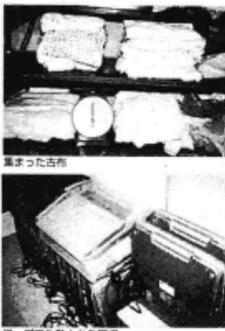
A 年一回開催するバザーに向けて、使い捨ててしまつた食用油を回収して約4000個の石けんを作ります。昨年は約80リットルの油を回収し、のべ35人ほど石けんづくりをしました。日数を問わず月間かがかりました。また、この作り方をあちこちで教えたりしています。

Q 古い布を回収してウエスとして活用する事業も行っておられるのですか？

A ウェス事業は、布の再利用(リユース)であり、要らない布を必要とするところへ引き取ってもらいたいという気持ちで、この事業を通して貢献していきたいです。

とになります。

作業は、会員約15名チームを作つて取り組んでいます。会員が集めた古着やシャツなどを、まだ十分着られるものと、ウエスに分別していくのですが、再度利用できるものは障害者の施設に回していますが、他は、ウエス(機織の油拭き)として、約40個四方に切りそろえます。この過程で出たハギレは、病院に引き取ってもらいます。洗い流すこともできないのをふき取る使い捨て雑巾として活用されています。院内感染が心配される中で、気かなく使えると評判です。



ウエスも約10台を回収

ています。

Q 「京いきいきボランティアまつり」では、中心的存在として推進されていますか？

A 私たちは、約20年前からバザーを開き、会員をはじめ多くの方に協力をしていただいています。その実績を軸として、京都府、社会福祉協議会なども加わり、実行委員会形式で推進することになったのが「京いきいきボランティアまつり」です。昨年は、12月4日、5日の2日間、みやこメッセで大バザーを盛り込んだ、多彩なプログラムで開催しました。おかげさまで市民のみならず手つないで開催する事業として発展してきました。今年も12月9日、10日(両日)みやこメッセにて開催する予定です。この確しを通して、京都という地域全体でボランティアを支援していく土壌が育まれてきたように感じています。

私たちの活動は、ゴミ減量もしくは環境を核に活動しているわけではありませんが、ゴミ減量もしくは環境も福祉や地域社会の中で多くの人々がかみながら手をつないで活動することによって共通しています。福祉と環境は21世紀の大きな課題です。今後も、前向きに取り組んでいきたいと考えています。

社団法人 京都ボランティア協会

事務局所在地
〒602-8143
京都市上京区堀川通九太町下ル 京都社会福祉会館内
☎075-842-0657 FAX.075-801-5217
ホームページ：
<http://web.kyotoinet.or.jp/org/kyo-vola>
理事長 藤本 守
開室日時 火曜日～土曜日
午前10時～午後9時

資源ごみ調査結果

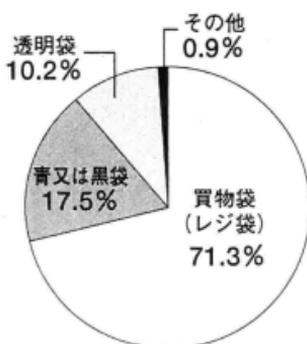
ペットボトルの回収、ごみに関する調査など、長年にわたり、消費者の立場から活動を重ねてきた桂生活学校・嵯峨アリス生活学校が、なにかと問題の多い資源ごみに注目。昨年9月～10月にかけて調査を行った。

桂生活学校・嵯峨アリス生活学校調査合計
 調査期間／平成11年9月～10月
 調査時間／午前8時～8時30分
 調査場所／桂東、桂、川岡、嵯峨地区 31ヶ所
 調査内容／袋の種類、内容物チェック

◆約7割がレジ袋に入れて出している

資源ごみは異物混入をなくするため、回収にあたる京都市では透明袋に入れて出すよう呼びかけている。しかし透明袋を店頭で手に入れることは難しく、多くがレジ袋で出されていた。

総袋数	買物袋(レジ袋)	透明袋	青又は黒の袋	その他
3661	2611	375	642	33
	71.3%	10.2%	17.5%	0.9%



◆異物混入(各校報告書に記載)

(混入物) 外から見えてなかったもの、開けてわかったもの並記
 開けてみた212袋中26袋に異物混入(12.2%)

- スプレー缶(穴を開けていない)
- 洗剤・シャンプーの容器
- 牛乳パックに入れたガラスコップ
- 一升ビン
- ビールビン
- トレイ
- 蓄時計電池4コ付
- 割れガラス
- ポリパック
- 蛍光灯
- ホーローやかん
- プラスチック製おもちゃ
- プラスチック容器
- 植木鉢受皿(プラスチック)
- 生ゴミ
- 毛糸
- キャップ付きペットボトル(黒や青の袋の中にレジ袋5～6コ入り)
- 二重袋入り
- 割れせともの
- アルミ鍋(蓋付き)
- 魚焼きあみ3枚

◆スプレー缶や割れガラスも混入

資源ごみは、缶(アルミ缶・スチール缶)とペットボトル、びん(リターナブルびんを除外)に限られている。なのに現実には…。プラスチック類、生ごみまでも一緒に入れられていた。それにリターナブルでできる一升びん、ビールびんまでもが混入され、啓蒙の不徹底が証明された。

◎混入物

- *キャップ、コルクのついたもの
- *洗ってないもの
- *天ぷらガード、油こし器

◎危険物

- *自動車のバッテリー
- *バイクのオイル缶

(感想)

- *異物混入多くきたくない
- *分別収集のきまりを市民がよくわかっていない
- *市民も悪いが市側も町内会組織を活用して教育しなければ
- *根本的には混合収集がよくない

調査結果を終えて

- *透明袋と定められていても殆ど出ていない
- *3種混合のため余計に異物が多く、啓蒙を徹底して住民の意識を高めることが大切である
- *定点回収のため取り残されたものの処理が困る
- *事前に回収業者が取って行くことが多い

あなたのご意見をお寄せください

このページは、ごみに関する自由な発言コーナーです。どなたでもどんなご意見でも歓迎します。京都市ごみ減量推進会議までお手紙をどうぞ。

〒604-8571 京都市中京区寺町御池
 京都市環境局事業部
 リサイクル推進課内

☎ 075-222-4091
 ☎ 075-213-0453

京都市ごみ減量推進会議 会報「ごみを減らそう!」NO.13
 2000年(平成12年)6月発行
 編集発行 京都市ごみ減量推進会議